

近代中国語敬語の垂直空間メタファー —対人関係のための心的世界—

The Imaginary World of Politeness Using Metaphors of Vertical Space in Early-Modern Chinese

彭 国 躍

(PENG Guoyue)

1. はじめに

近代中国語において「敬辞」と呼ばれる複雑な敬語システムが存在していた。敬辞はことばの字義通りの概念的意味を介して待遇的な含意を表す一連のメタファーによって成り立っている。その敬語システムについて、日本語の敬語のように形態論的、あるいは構文論的な枠組みで記述することができず、真理値条件に基づく従来の意味論の立場からも捉えることができない。そのため、これまで言語学において中国語の伝統的な敬語現象を真っ正面から取り上げることは方法論的に難しかった。しかし、近年では、語用論や認知言語学の発展に伴い、言語表現の意味解釈において様々なモデルが提案され、敬語研究において新たな可能性が開かれるようになった。本稿は、認知言語学におけるメンタル・スペース理論の視点を導入し、敬辞における垂直空間表現に焦点をあて、その意味構造、理解と伝達のプロセスの解明に努めたい。

2. 垂直空間メタファー

メタファーは、単なる文学的修辞法ではなく、人間が世界現象を認識し、理解する過程においても極めて重要な役割を果たしている。人間の理解作用や認知構造に深くかかわるメタファーのことは理解のメタファーと呼ばれる。メタファーによる人間の理解作用には次のような二つの特徴が見られる。一つは既知の概念に基づいて未知の世界をメタファー的に理解し、概念化すること、もう一つは身近で具体的な概念を通して抽象的な概念をメタファー的に理解することである。そして、このような認知レベルで行われたメタファーが様々な形で言語表現の上に烙印を落とし、様々な言語的なメタファー現象を成り立たせている。

人間が地球上で直立した形で生活している。このような生活形態と関係して、われわれは自分の体の垂直性を通して、頭上は「上」で、足元は「下」、経験的に雨は上から地面へと垂直に落ちてくると知覚するので「下雨」(雨が降る)、太陽は地平線から昇るように見えるので「太陽升起」(日が昇る)などとそれぞれ理解し、表現する。このような日常的経験に基づく垂直空間概念は他の様々な概念を理解するための基底概念となっている。われわれが持っている数多くの概念はこのような物理的垂直空間概念の写像によってメタファー的に理解されている。例えば、

- ①老張去年晋昇部長了。(張さんは去年部長に昇進した)
- ②許多幹部都下基層去了。(多くの幹部たちは現場へと下りた)

- ③他近来情緒低沈。(彼は最近沈みがちだ)
 ④当時学生們都去下郷勞働。(当時学生達は農村へ赴いて〈下って〉働いた)
 ⑤今年の行情看涨。(今年の景気は上々だ)
 ⑥紡績工業處于低潮。(紡績業界はいま低調である)
 ⑦他因過度疲勞而倒下。(彼は過勞で倒れた)
 ⑧担心社会治安会逐年壞下去。(治安が年々悪くなり下がっていくのが心配だ)

これらの表現の裏には、「支配は上、従属は下」、「喜びは上、悲しみは下」、「都市は上、田舎は下」、「経済的に活気あることは上、活気ないことは下」、「健康は上、病気は下」、「善いことは上、悪いことは下」などの様々な理解のメタファーが隠されている。これらのメタファーは慣習化されることにより、メタファーとして意識されなくなったので、従来、死んだメタファーと呼ばれている。しかし、死んだと思われたこれらのメタファーにも、具体的で身近な経験領域を通してより抽象的な概念を理解するというわれわれの認知作用が働き続けている。近代中国語において、このような垂直空間によるメタファー的理解作用は人間関係の理解と表現にも大きな影響を及ぼしている。

3. 敬辞の垂直空間表現

近代中国語の敬語には垂直空間概念を表す表現がたくさん使われていた。言語行動の上で礼儀正しく振る舞うために、次の例(1)~(8)が示すように相手と自分との間に物理的空間の差があるようにメタファー的に表現する習慣があった。

- (1) 高居何處。(〈高い〉お住まいはどちらですか)『金』
 (2) 明日好歹下降寒舍。(明日ぜひ家にお越し〈降りて〉ください)『金』
 (3) 求老爺俯納。(殿様に〈俯いて〉お納めいただきとう存じます)『儒』
 (4) 大人垂愛, 小侄豈不知。(〈垂れて〉ご愛顧くださることをよく存じ上げております)『儒』
 (5) 下官不勝欣喜。(私〈下の役人〉はうれしく存じます)『金』
 (6) 在下姚霍武, 山東人氏。(私〈下にいるもの〉、姚霍武と申しまして、山東の生まれでございます)『蜃』
 (7) 請正台顔, 容晚生仰側一二。(お顔を直っすぐにしてください。顔相を〈仰いで〉拝見させていただきます)『玉』
 (8) 我們合家大小, 登門去磕頭。(うち一家揃ってお宅にご挨拶に〈登って〉参ります)『紅』
 (〈 〉内は敬辞の一次的な字義通りの意味を表す)

(1)~(4)のように、相手の住まいを「高居(高い住まい)」、相手が自分のところに来ることを「下降(降りる)」、相手が自分からの送り物を受け取ることを「俯納(俯いて納める)」、相手が自分のことを心配することを「垂愛(愛を垂れる)」などと表現する。そして、(5)~(8)のように、自分のことを「下官(下の役人)、在下(下にいる者)」、自分が相手を見る行為を「仰測(仰いで見る)」、相手の家を訪ねることを「登門(門に登る)」などと表現する。

垂直空間概念を使って人間関係を表すこれらの敬語表現は、具象概念を通して抽象概念を理解するという点で2節で上げた理解のメタファー現象と同質である。対人関係のために使われたこれらのメタファー表現には二つの特徴が見られる。一つはこれらの表現の文字通りの意味は語源的な意味としてではなく、現実の意味としてそのまま生きている。つまりこれらの表現の敬語としての機能はその一次的な意味における垂直空間の差を通して表されたもので、日本語の「お」、「なさる」、「~(ら)れる」のよ

うに特定の形態に基づいて記号化，文法化されたものではないということである。もう一つは，これらのメタファー表現は単なるその場限りの個別現象，文学的，詩的な修辞効果をねらった一時的なことばの彩として存在したのではなく，意味的に明確な構造的な特徴を持ち，社会的に一般化したものである。

近代中国語において使われたこの種の敬語表現をその表現上の特徴によってまとめると，次のようなものが上げられる。

まず，他者の所有物，属性，心情などに言及する場合に，垂直空間の上位概念の表現「高～<高い>，上～<上の>，～上<上の>」などが前置または後置限定詞として使われる。

高名（お名前），高軒・高居・高齋・高住（お宅），高鄰（お隣），高情・高懐（お気持ち），高寿（お年）／上客・上賓（お客），上国（お国），上刹・上方（御殿），上人（師匠様），上宮（お宅），上房（お部屋），上姓（お名前），上裁（ご判断）／尊上（ご両親），長上（お年寄り），宅上・府上（お宅），聖上・主上・皇上（陛下）…

そして，他者の動作，行為などに言及する場合に，垂直空間における上から下への移動方向や向きを表す表現「降<降りる>，下<下向きに>，俯<俯く>，垂<垂れる>」などが使われる。

光降（お越し下さる）／下臨（お越し下さる），下教（お教え下さる），下問（お訪ね下さる），下交（お付き合い下さる）／俯納（お納め下さる），俯聴（お聞き下さる），俯允（お許し下さる），俯臨（お越し下さる）／垂救（お助け下さる），垂愛（ご愛顧下さる），垂聴（お聞き下さる），垂示（お示し下さる）…

一方，自己の所有物，属性，心情などに言及する場合には，垂直空間の下位概念の表現「下」が前置または後置限定詞として使われる。

下官・下士・下学・下鄙（私），下情・下懐・下忱（私の気持ち）／舍下（私の家），臣下（私），房下（家内）…

更に自己の動作，行為などに言及する場合には，垂直空間における下から上への移動方向や向きを表す表現「攀<登る>，登<登る>，仰<仰ぐ>，瞻<見上げる>，上<上向きに>」などが使われる。

高攀・仰攀（お付き合いする）／登門・登堂・登龍（お訪ねする）／仰観（拝見する），仰報（お知らせする）／瞻仰（拝見する），失瞻（お目にかかれず失礼）／上領（いただく），上告・上達・上覆（お知らせする）…

従来中国語において以上のような他者（聞き手と登場人物を含めて）に対する表現は「尊辞」，自己（話し手）に対する表現は「謙辞」と呼ばれる。尊辞と謙辞に使われた垂直空間表現間の関係について次の表にまとめることができる。

位置概念	動作概念
尊辞 (上位) 高 上	(下向き) 下 降 俯 垂
謙辞 (下位) 下	(上向き) 下 攀 仰 瞻 登

ここで一つ注目すべき現象が観察される。それは同一形態の表現が尊辞と謙辞の両方に使われているということである。「上姓」、「上裁」における「上」は尊辞であるが、「上領」、「上覆」における「上」は謙辞である。そして「下臨」、「下教」における「下」は尊辞であるが、「下士」、「下情」における「下」は謙辞である。このように同一形態が尊辞と謙辞という相反した二つの待遇機能を持つことは一見矛盾しているように見える。しかし、その形態的特徴にとらわれず、その概念的意味を見ると、尊辞における「上(上の)」、「下(下向きに)」と謙辞における「上(上向きに)」、「下(下の)」はそれぞれ異なる意味を表していることが分かる。この現象は、中国語の敬辞は形式的にパターン化せず本質的に、構文論、形態論の問題ではなく、意味論の問題であることを端的に物語っている。

これらの敬語表現の意味の相互関係から、その背後に「他者は上で、自己は下である」という人間関係に対するメタファー的な捉え方が存在し、垂直空間の位置関係及びその関係によって構成された概念構造が自己と他者の人間関係に写像された姿が浮かび上がる。個々の敬語表現はこの基本構造の中の一つの側面を表すもので、各表現は一つの意味体系の中で互いに関連し、垂直空間概念をめぐる一つの意味ネットワークを形成させている。

しかし、①～⑧のような発話は、すべて現実世界における他者と自己の物理的位置関係のいかんにかかわらず使用されている。つまり、これらの表現は人間関係をよくし、丁寧に振る舞うために行われた偽りの表現、言わば社会的に承認された一種のウソの発話である。このような発話表現の成立について合理的な意味解釈のモデルが必要となる。

4. 対人関係のメンタル・スペース

以上で、近代中国語において現実の垂直空間関係を表さない垂直空間表現が体系的に行われていた事実が確認された。それは自己と他者の人間関係を垂直空間という物理的経験領域の概念を介してメタファー的に捉え、表現した結果である。しかし、現実の空間関係を表さないこのような表現はなぜ情報伝達の混乱を起こすことにならなかったのか、そして、このような表現の意味についてどのように規定し、理論的にどう解釈すべきかは、これまで一つの謎とされてきた。外部世界の事実と照準を合わせる真理値意味論の解釈に基づけば、以上の表現が使われた発話はすべて現実世界の事実と反し、ただの偽りの発話として片付けられてしまう。

人間が発話行為を行う場合、すべて外部世界そのものと一対一の関係で事実を記述し、表現するものではない。この点については、近年の語用論や認知言語学においてさまざまな議論がなされた。オースティンの言語行為理論にしても、グライスの含意理論にしても、そしてレーコフのメタファー解釈においても、基本的に字義通りの意味を越えた言語使用の解釈モデルを提供したものである。このようなさまざまな意味解釈のモデルの中にフォコニエのメンタルスペース理論がある。フォコニエ (Gilles Fauconnier 1985) は従来の意味解釈の立場を根本的に変える仮説を考案した。彼によれば、言語は、直

接外部世界を正しく、または間違っ表現し、反映するのではなく、人間が外部世界への認知過程において作り出された心的世界を表現し、反映するものである。言語によって表現された意味の世界は、現実の世界そのものの表象ではなく、その言語社会の人間によって認知された心的概念世界の表象である。そして、ことばの意味も、直接言語と現実世界との関係によって規定されるのではなく、言語と心的世界との関係によって規定されるべきであり、言語と現実世界との関係は、メンタル・スペース（心的空間）という認知インターフェースを介して関係付けられると考えられている。

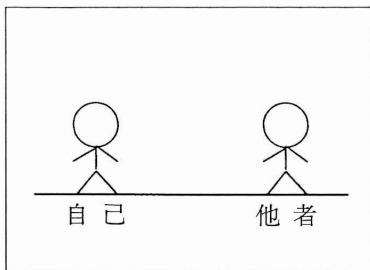
フォコニエ（1985）は英語などにおける定・不定表現や名詞句の意味解釈などを通してこの理論の有効性を立証した。ここではフォコニエの基本的な考え方に基づいて、敬辞の垂直空間概念表現の意味分析を試みる。

言語が心的世界を表現するという視点に立って敬辞の意味を考える場合、まず敬辞によって表された意味世界は直接に外部世界に対応する必要がなくなるので、「真／偽」の問題はまず回避される。それによりわれわれは敬辞発話によって表現された意味世界そのものの記述に関心を集中させることができる。敬辞の意味を規定するために、まず敬辞を、それが使われた言語社会の人々によって認知された一種の心的イメージ世界を反映するものとして捉え、メンタル・スペースの設定などの操作により、敬辞の心的イメージ世界を規定し、具体化することが可能となる。このような考え方にに基づき、中国語の敬辞について、他者と自己を礼儀正しく表現しようとすれば、人々は心の中で対人関係のために一種のイメージ世界を作り、その仮想空間の中で他者と自己の位置関係を想像し、それをことばに表すという伝達のプロセスが想定される。

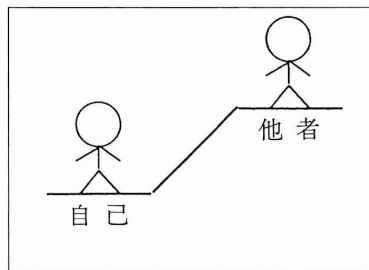
垂直空間概念を表す敬辞が反映した心的世界とはどのようなものであろうか。

(1)～(8)の発話が使われた物理的空間のコンテクストにおいて相手と発話者はすべて同一水平上に位置している。このような物理的空間関係は(9)Aのように図形化できる。そして、発話者は社会的身分関係や場面状況などに基づき、心の中でその相手と自分との人間関係に相応しい仮想空間を作り、その中において両者の位置関係をイメージする。このようにイメージされた空間をここで「対人関係の仮想空間」と名付ける。この対人関係のために想像された心的空間は(9)Bのように図形化することができる。この二つの空間を比較すると明らかのように、(1)～(8)などのような敬辞が表現しているのは、Aの物理的現実世界そのものではなく、発話参与者間の人間関係に基づいて想像されたBのような仮想空間であることが分かる。したがって、2節で示された敬辞の垂直空間表現の意味について、(9)Aのような物理的空間ではなく、(9)Bのような心的世界の事象に対応するものとして解釈できる。

(9)



A 現実世界の物理的空間



B 対人関係の仮想空間

この対人関係の心的空間を想定することにより、一見偽りで、現実と矛盾する表現がその意味解釈のよりどころとなる対象世界を獲得し、敬辞の動機付けとなる意味論的根拠が浮かび上がってくる。そして、尊敬すべき人や社会的地位の高い人と話し、またはそのような人の話題をする時に、人々は心の中でその人間関係を反映するような仮想空間を作り、その仮想空間における位置関係に基づいて表現するという敬辞の表現プロセスについて、論理的に説明することが可能となる。

しかし、このような心的世界を表す敬辞表現は、いかにして現実の物理的世界の人間を指すことができるのだろうか。

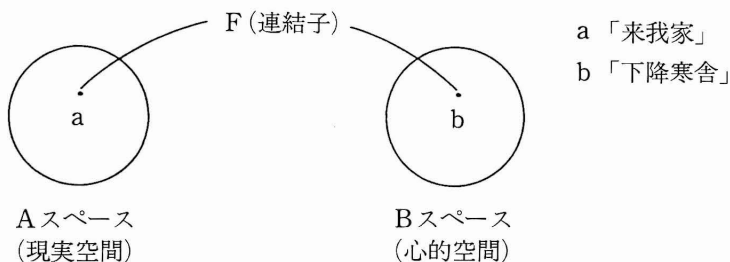
心的世界は、発話者個人の心的イメージや、同じ言語社会の人々によって獲得された共通の心的世界像など様々なレベルのものが考えられる。様々なレベルの心的世界を具体的に規定するために、メンタル・スペース（略称：スペース）と呼ばれる操作概念を導入する必要がある。発話者の心的世界には、発話の内容により複数のメンタル・スペースが導入可能である。敬辞の発話を行う際には、少なくとも二つのスペースが関与したと考えられる。一つは発話者によって理解された物理的空間に対応するスペースで、もう一つは対人関係に基づいて想像された非現実的な仮想空間に対応するスペースである。そして、二つのスペースの関係は同定機能を持つ連結子 F (connector) と呼ばれる関数によって結ばれると仮定する。そして、連結子 F が機能する関数条件を次のように規定する。

連結子 F の関数条件：発話者が礼儀正しく振る舞わなければならない文脈。

連結子の語用的関数条件が満足されれば、二つのスペースが結ばれ、その指示対象が同定される。同じ言語社会に生きる人間は共通のメンタル・スペースを喚起する能力を持ち、発話の受信者は発話を聞いた時に、心の中に二つのスペースを喚起し、連結子の同定作用を通して、対人関係のスペースを現実世界のスペースに結び、前者は後者の対人関係を考慮した上での認知世界であることを理解することに成功する。

具体例で分析しよう。(2)のような文を発する場合、話し手の心の中に、現実世界（ここでは正確には小説世界の中で想定された物理的世界）に対応するスペース a と、対人関係のための仮想空間に対応するスペース b が想定される。対人関係のスペースの導入により、発話者のイメージ世界において自分と他者の垂直空間における位置関係が変わり、スペース a において同一水平上にいる相手が、スペース b においては自分より上位に位置付けられる。このような心理的操作により、現実世界において相手が「来我家（私の家に来る）」という行為は、対人関係のスペースにおいては「下降寒舎（寒いあばらやへ降りる）」という形で捉えられ、イメージされる。そして、発話(2)は豪族の奥様同士の会話に現れたもので、連結子 F が機能する語用的関数条件が満たされる。連結子 F の同定作用により(10)のように対人関係のスペースと現実世界のスペースが結ばれ、双方の同定関係が成立する。発話の受信者の立場から見れば、発話(2)を聞くことにより、まず相手の立場による対人関係のスペース b を喚起する。関数条件の成立により連結子による同定作用が行われ、発話の受け手は現実世界におけるスペース a との同定関係を理解し、その発話は自分が相手の家へ行く行為の、相手の立場による礼儀的で、丁寧な捉え方、言い方であるという解釈にたどり着く。

(10)



このように、メンタル・スペースの理論に基づき、対人関係のスペースを設け、連結子の同定作用を認めることによって、一つのスペースの中で扱う場合に生じる敬辞の意味解釈の混乱と矛盾が避けられる。しかも、グライス流の語用論における含意産出のための種々の原理、原則の適用や複雑な推論過程を推定せずに済むことになる。(グライス流の分析については彭1993を参照されたい)

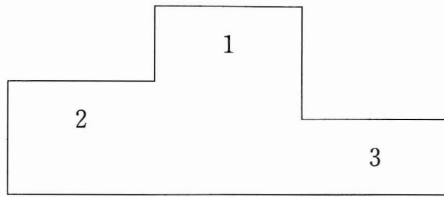
対人関係のスペースは認知レベルでの心的仮想空間なので、心の外では何ら存在論的根拠を持つ必要がないため、現実世界との一致が要求されず、真理値の議論を越えて、表現の意味解釈において自在に機能することができる。

敬辞の垂直空間表現だけでなく、本稿では割愛するが、敬辞において他者に対して「大～、尊～、龍～」、自分に関して「小～、卑～、犬～」などと表現する現象についても、このように、対人関係のためのメンタル・スペースを設けることにより意味論の上で明解な解釈を与えることが可能となる。

5. 空間認知と価値認識

まだ謎は一つ残る。なぜ対人関係のメンタル・スペースにおいて、他者を上に、自己を下に位置付け、そしてその位置付けに基づいて表現する方が礼儀的で、丁寧になるか、なぜその逆ではないか。対人関係のメンタル・スペースを動機づけるものは何か。これらの疑問に答えるために、われわれは存在論的認識論から価値的認識論へと視点を広げる必要がある。

自然科学、とりわけ物理学のような認識世界において、空間概念は常に価値判断を排除したある種の客観世界として捉えられている。上下などの空間上の相違はあくまでも垂直軸における相対的な位置関係の違いであり、その間に価値的な差は認められないのである。物理学においてより高いことは善いとも悪いとも言えないのである。しかし、われわれは日常このような無価値の世界に生きているわけではない。日常われわれによって認知された空間概念は、価値付けされた空間領域である。空間に対するわれわれの認識には、常にある種の価値的認識が伴う。上と下、中央と周辺、南と北、左と右、表と裏などの空間的位置に対して、われわれは常に何らかの価値的評価を行う。そして、このような価値判断には、個人的な好みや社会的、文化的共通の価値観など様々なレベルが存在する。垂直空間に関して、地球上の多くの文化において「上は善く、下は悪い」という価値観が存在する。キリスト教文化に限らず、「天国」は上にあり、「地獄」は下にあると、多くの文化の中で信じられている。オリンピックの表彰台にもこのような空間に対する価値認識が反映されている。高い所は低い所より価値的に優位、中央は周辺より価値的に優位、右側は左側より価値的に優位である。



勿論、このような価値観があるからと言って必ずしもそれに対応する敬語体系が成立するとは限らない。少なくとも中国文化においてこのような垂直空間に対する価値観の影響により、対人関係のための仮想空間が人間関係の文化的認知モデルとして成り立ち、そして、そのモデルによる体系的な敬語表現が生まれたのである。

対人関係のための垂直空間のメンタル・スペース及びそのスペースを表現する敬辞は、結局、垂直空間に対する文化的価値観によって動機付けられ、意味付けられている。

6. おわりに

以上の考察を通して、近代中国語の敬辞における垂直空間表現は、単なる表現上の調節機能を果たす恣意的な形式体系ではなく、その言語社会における人間関係の捉え方、心的世界の認知構造及びその文化的価値観などに深くかかわり、それらによって動機付けられるものであったことが明らかになったと言える。

中国語ほど概念的に構造化、体系化していないが、英語においても「your highness」, 「his highness」, 日本語においても「～て下さる」, 「申し上げる」など垂直空間にかかわる敬語表現が存在する。この現象は、対人関係の垂直空間表現は中国語敬語の特徴的な表現法ではあるが、その背景に特定の言語や文化を越えたある種の共通性、普遍性が存在していることを示唆している。

用例出典：

略名	書名	著者・編者	底本版本	年代	新版	新版年
『金』	『金瓶梅詞話』	蘭陵笑笑生	万歴丁巳版	17世紀(明)	星海文化	1987
『玉』	『玉嬌梨』	夷荻散人	本衙藏版	17世紀(明)	春風文芸	1981
『儒』	『儒林外史』	吳敬梓	嘉慶丙子版	18世紀(清)	上海古籍	1991
『紅』	『紅樓夢』	曹雪芹, 高鶚	庚辰本, 程甲本	18世紀(清)	人民文学	1992
『蜃』	『蜃楼志』	禺山老人編	嘉慶12年刻本	18世紀(清)	齊魯書社	1988

参考文献

- Brown, P. and Levinson, S. (1987) *Politeness : Some Universals in Language Usage*. Cambridge University Press.
- 陳海烈, 徐英 (1989) 『礼貌詞語詞典』廣州文化出版社
- Fauconnier 1984 *Mental Spaces* MIT Press
- Grice 1975 "Logic and Conversation" *Syntax and Semantics Vol. 3. Speech Acts* Academic Press, INC
- 顧曰国 1992 「礼貌, 語用与文化」 『外語教学与研究』 4月号北京外国語学院
- 井出 祥子, 彭 国躍 1994 「敬語表現のタイポロジー」 月間『言語』 9月号
- 井出 祥子, 彭 国躍 1996 *Linguistic Politeness in Chinese Japanese and English from A Socio-Historical Perspective* 『言語学林1995~1996』三省堂

Lakoff, George 1987 *Women, Fire, and Dangerous Things* The University of Chicago

Leech, Geoffrey. N 1983 *Principles of Pragmatics* Longman Group Limited

Levinson, Stephen. C 1983 *Pragmatics* Cambridge University Press

彭 国躍 1993 「近代中国語の敬語の語用論的考察」『言語研究』(第103号) 日本言語学会

彭 国躍 1995 a 「近代中国語の敬辞とその被修飾成分との共起関係 — 親族名称を中心に」『中国語学』(第242号) 日本中国語学会

彭 国躍 1995 b 「『金瓶梅詞話』の「年齢質問」発話行為と敬語表現 — 社会言語学的アプローチ」『言語研究』(第108号) 日本言語学会

彭 国躍 1995 c 「近代中国語敬辞体系の理論的枠組み — 陰陽世界観に基づく対人関係の認知システム」『富山大学人文学部紀要』(第23号) 富山大学人文学部

彭 国躍 1995 d 「メタファー類似性問題の一考察 — 類似説と創造説の隙間」『日本学報』(第14号) 大阪大学文学部

彭 国躍 1996 「近代中国語敬辞の文脈条件の一考察」『富山大学人文学部紀要』(第23号) 富山大学人文学部

彭 国躍 1997 a 「近代中国語敬辞体系の記述」『中国語研究』(第39号) 白帝社

彭 国躍 1997 b 「中国語敬辞体系の衰退プロセス — 言語と社会の通時的共振性」『計量国語学』21巻3号 計量国語学会

坂原 茂 (1989) 「メンタル・スペース理論概説」『日本語のモダリティ』くろしお出版